

必然性のある学習課題の設定と見直しをもたせる工夫

学習課題設定のポイント…



「～について読み取ろう」「～について考えよう」「～について調べよう」という「行動目標」となる課題は何を考えればいいのか明確になっていません。また、教師の一方的な提示となりがちです。子どもが考える必然性を持ち、学習意欲を高めるためには「問いを引き出す」ことが必要です。そして、その「問い」を学習課題につなげていきましょう。

「問い」を引き出すために…



子どもの問いを課題につなげましょう。

「資料等の提示の仕方」や「活動の設定の仕方」を工夫しましょう。

子どもの問いを学習課題につなげる発問。

<例>

- 資料を少しずつ見せる。
一部を隠して見せる。
→ 資料の先を予想させる。
- 複数の資料を比較(対比)させる。
→ 違いを問う。
→ 変化を問う。(before afterの対比)
- 事象(現象)の理由を考えさせる。
→ 事象(現象)の特徴をおさえ理由を問う。
- Black Boxによる提示や結果一覧から決まりを見出させる。
→ 規則性を問う。
- 既習内容の問題や事柄から未習内容の問題や事柄へ活動を移行し、新たな疑問をうむ。
- 分類したり類別したりする活動の中で、似て非なるものを提示することで、迷い(問い)をうむ。
- 条件を加え、負荷をあたえることで(無理難題を言う)解決への意欲を高める。



問
い
を
課
題
へ
つ
な
げ
る

- 「ということは、みんなが調べたいことは？」
- 「みんなの疑問を整理すると□□という課題になるけどどうですか？」
- 「ということは、今日は何を考える必要がありますか？」
- 「Aさんの疑問いいですね。それをみんなの課題にしようか？」

具体的な学習課題の例は、次のページをご覧ください。

- ※ 本時の目標と整合性が図られているか十分に吟味しましょう。
- ※ 子どもの思考の流れを想定して提示しましょう。

課題解決の見直しをもたせましょう。

- 解決の方法の見直しをもたせる。
→ 「こうすればできるんじゃないかな?」「この方法が使えるかな?」
- 答えの見直しをもたせる。
→ 「こうなりそうだな。」「だいたいこのくらいになるかな。」
- 課題について、調べる視点をもたせる。
→ 「このあたりから調べれば分かりそう。」
- 課題解決に向けた、学習活動の道筋の見直しをもたせる。
→ 「初めに～をして、次に～をして、最後に～をすれば、解決できそう。」



教師による学習課題設定だったとしても…

日々の授業において、必ずしも毎時間、子どもから「問い」を引き出し課題につなげることができるとは限らず、教師が課題を提示することも考えられます。また、技能教科においては、「～しよう」という行動目標になってしまうこともあると思います。

しかし、そのような場合においても、次のように発問を工夫することで、学習の主体者である子どもたちに課題を意識させるようにすることが大事です。

- 「前の時間に課題として残っていたことを思い出してみましょう。」
- 「今日は、学級全体としてこんな『めあて』に取り組みたいのですが、どのように学習していけばいいでしょうか。」
- 「では、それぞれにどんなことに気を付けて学習するかを考えてみましょう。」

その学習課題、ちょっとした工夫で変わります！

◇ 子どもから問いを引き出し、解決の必要感から設定した課題

<小学校1年 算数「たしざん」>

本時のねらいが、「 $4 + 8$ の計算の仕方を考えることを通して、被加数を分解して計算する方法について理解する。」である時、下の2つの学習課題のうち、児童の学習意欲を喚起し、しかも本時のねらいに直結する学習活動が予想されるのはどちらでしょうか。

A「 $4 + 8$ の計算のしかたを考えよう」

B「どちらに10のまとまりをつくらうかな」

Aは、どのような四則演算でもよく見られる学習課題です。しかし、本時では、Bを問うことによって既習と異なる方法があることに気付かせることができ、ねらいに直結する学習活動が期待できます。

問題 たまごは あわせて なんこですか

どちらを10にしようかな。



算数においてBのような学習課題を作るには、教科書のキャラクターのつぶやきが参考になります。

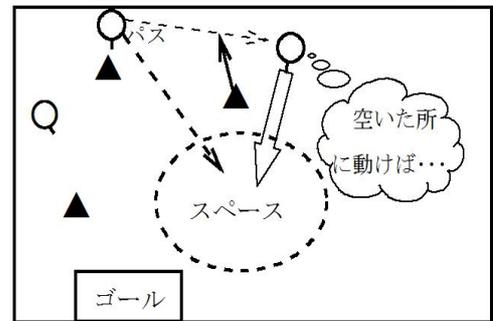
<小学校5年 体育「ゴール型ゲーム」>

T 前の時間のパスはどうだった？

C パスをすると相手にとられた。

C あまりボールをもらえなくて、ゲームにならなかった。

T パスをもらう側はどんな工夫をすればいいかな？



そこで、**学習課題を「どこに動けば、うまくパスがもらえるだろうか。」と設定**します。例えば、「パスのもらい方を工夫してゲームをしよう」と教師が一方的に提示するよりも、学習内容（空いた場所に素早く動くこと）について主体的に思考させ、運動させることができます。

技能を中心とした教科であっても工夫することで、子どもの問いを引き出して必然性のある課題を設定することができます。

<中学校1年 数学「正負の数」>

問題 バスケットボール部員8人の身長を、いろいろな方法で求めてみましょう。

A : 153 cm B : 148 cm C : 152 cm D : 155 cm

E : 150 cm F : 159 cm G : 147 cm H : 152 cm

問題をそのまま課題にしていけないでしょうか。

問題と課題は区別して提示したいものです。

「～について考えよう」の課題から脱却し、「なぜ～」「どのように～」など、子どもの問いのある課題を設定し、何を考えるか学習内容を示唆する課題を設定したいものです。

上のような問題を受け、最初に小学校で学んだ身長の合計を人数で割る方法で答えを出します。その後、Aのような課題を設定する場合と、さらに小学校で行った「仮の平均」を定めて計算する方法があることを振り返り、Bのような課題につなげる場合があります。

A「もっと簡単に求める方法を考えよう」

B「どのように仮の平均を設定すると簡単に求められるだろうか」

Aは、漠然としていて、生徒自身がどのような学習をすればよいかととらえにくい課題です。それに対してBの課題は、仮の平均をどのように設定すればよいかを学習することが課題の中に示されています。また「仮の平均を最大値と最小値の間に設定することで正負の数が活用でき、簡単に求めることができる」というまとめとの整合性がとれる課題となっています。